

藤香会だより

新年を迎えて



会長 山崎 拓

新年明けましておめでとうございます。新年にあたり、今年には次の二つを課題として取り組んでいきたいと考えています。

一つは、大河ドラマ「軍師 官兵衛」の盛り上がりを継続して行く事です。その為にも会の目的である黒田家の遺徳を顕彰し、郷土福岡の歴史を深く知ると共に、今、拡がりつつある地元自治体やマスコミとの連携を強め、私たちの活動を周知するための広報活動が重要となります。また、「黒田奨学会」、「福岡市民の会」との連携を密にし、お互いに補完、協力して進めていきます。

二つめは、財政基盤の強化を図る事です。会員数は増えて、2000名を維持しておりますが、今後も「藤香会会員になってよかった」と思えるような企画運営を考えていきます。それには、何か会としての「事業」を考えなくてははいけません。また会員相互の親睦を図るための機会を多くし、会を魅力あるものにする必要もあります。その為にも会員の皆様には、「会の行事」にできるだけ参加をお願いいたします。

早速ですが、2月12日の東長寺での忠之公等の法要には16代当主黒田長高様も参列される予定ですので、是非振るってご参加ください。

長政公393回忌ご法要

昨年8月4日の393回忌ご法要には16代当主長高様を迎えて、藤香会会員約70名が参列して執り行われました。

長政公の肖像が掲げられた本堂で岩月海洞老師の読経の中、長高様を初め参列者各位牌の前で焼香をしました。

その後、黒田家墓所に向かい、僧侶の読経が続く中を墓前で順次焼香を行いました。

長高様は挨拶で、「黒田家墓所は福岡市に寄贈したが、実際に守ってくれたのは藤香会で、感謝したい。これからも大事にしてほしい。」と話されました。



墓前でご焼香される長高様

黒田佐兵衛様(光之公三男)

350年御忌法要

黒田光之公の三男で天逝(6歳)された黒田佐兵衛様の350年御忌法要が、黒田監物(けんもつ)一族の菩提寺である妙楽寺で10月25日執り行われた。当日、妙楽寺では開山忌と藤蔭流の大茶会も同時に催された。法要は黒田長高様はじめ多くの檀家(約80人)のほかに藤蔭流会員の和装の婦人(約20人)も多数出席され、厳かの中にも華やかな式典となった。藤香会から山崎会長はじめ毛屋副会長、中島顧問、田島事務局長ほか大島、篠原、近藤、原の各理事が出席した。

歴史勉強会開催

9月18日(金)福岡市博物館で開催されました。会員と一般市民の方60名が熱心に聞き入りました。

講師は博物館学芸員の高山英朗先生で、「関ヶ原の戦いと黒田長政」と題して、関ヶ原の戦い前後における黒田長政の動きを中心に説明されました。

戦前には、毛利輝元や吉川広家の領国安堵の約束を家康に取り付けて、実質的に参戦できなくした事。小早川秀秋を寝返らせて東軍に数的な優位の状況をもたらした事など、長政や相手方の血判起請文の古文書を提示されて説明された。

戦後も大坂城請取のため、西の丸に在陣していた毛利輝元を撤退させ、大坂城を無防備に近い状態にしたこと、大坂城下の治安回復のための法度(法律)を作ったことを家康からの文書を提示しながら説明された。これらの



妙楽寺でのご法要



勉強会風景

功績により筑前52万石という大藩を預かることになったのではないかと思うと話された。

第13回全国藩校サミット 福岡大会開催



江戸時代に各藩が設置した藩校の教育を現代に生かそうという「第13回全国藩校サミット福岡大会」が10月3日福岡市のホテルニューオータニ博多で開催されました。およそ1400人が参加し、高藤香会からは毛屋副会長が実行委員として、会員も10数名の会員が出席しました。

出席され、福岡藩からは黒田長高様が大会名誉会長として参加されました。

大会は「グローバル時代を拓く藩校の息吹」をテーマに、漢字文化振興協会の石川忠久会長が講演され、講師の神田紅さんは講演「藩校の歩みと金子堅太郎」で会場を沸かせました。その後、修猷館出身者3名によるパネルディスカッションが開催され、日本取引所グループの清田瞭(あきら)氏は「藩校はリーダーの資質を持った人を選び育てる機関であった。現在の指導者層の教育にも生かせる」と話した。

最後に「和魂洋才の精神を未来にわたって教育の場に醸成する」という福岡宣言を採択して閉会しました。

会員クリック⑰



藤香会会員 的野ハツ子

小雨の中、神松寺の閑静な自宅を訪ねました。お宅には着物を着たマネキンのほか、的野さんがお作りになったさまざまな「おきあげ」が飾ってありました。

まず藤香会に入会されたきっかけと時期をお尋ねしました。お母さまが「土族会」(藤香会の前身の報告会か)に入っており、亡くなる前と男の兄弟が2人いたが、自分が入ることにしたそうです。

的野さんの実家八尋家の先祖は樋井川村の記録係をしていた由。分限帳によると、七郎右衛門・七兵衛家は270石馬廻組、清五郎・安八・安八家は4人10石または3人13石の家柄との記述がある。的野さんによると参勤交代のお供を命ぜられて江戸へ登ったそうで、道中に使った「渋合羽」や携行した「塗り物の茶碗、お椀」

などがあつたがいつのまにか散逸してしまつたとのことである。

戦後、下魚町にあつた的野家に嫁ぎました。義父は博多人形師で小島与一さんの弟子でありました。当時は雑器や植木鉢に置く飾りのようなものを作っていたそうです。

実家も嫁ぎ先の商家もお正月ともなると大勢の来客があり、小さい時から大量の料理を作らせられていたそうです。自分たちの家を持つた後もご主人の同僚たちがやってくるたびに30人分くらいの鍋などを準備したと言われました。今でも庭にある桜の大きさが花を咲かせる時期には大勢の人が集まって賑わうそうです。料理は自ら腕を奮われ準備されるとか。

また多趣味でも知られています。藤香会でも披露された日本舞踊をはじめ民謡(博多民謡協会)、華道(真生流)、どんたく(福神流)での海外訪問もハワイ、オクラランド、サンフランシスコを廻られたとのことでした。また、数年前から「おきあげ」を作っておられます。

お世話好き、お祭り好きの博多のこりようさんを彷彿とさせる方です。これからもますますご健康で、藤香会の行事にも参加していただきたいと思ひます。(天本記)

史跡めぐり(10月13日)

直方東蓮寺藩をたづねて

10月13日、晴天に恵まれ、会員および家族25名は東蓮寺藩のあつた直方市へ向かいました。直方では地元歴史研究会である「とうれんじ」の会長さんを初めとする会員の方々の案内で、藩主の館跡や黒田家ゆかりのお寺などを訪ねました。

東蓮寺藩は長政公の四男高政公が支藩を建てました。支藩としてはおよそ100年間に亘りましたが、4代藩主長清公の子長好が本藩の6代藩主継高公となって、東蓮寺(直方)藩は廃藩になりました。



史跡めぐり参加の皆様

平成27年新入会の方々

- | | | |
|-------|----|------|
| 平成27年 | 2月 | 瀧口宗芳 |
| | 3月 | 大庭清利 |
| | 6月 | 黒田清利 |
| | | 中山清利 |
| | | 内田重人 |
| | | 高取栄作 |
| | | 小河浩 |

(敬称略)

大蔵谷回駕のこと



文久2年(1862)の最大の政治的事件は薩摩藩の国父島津久光による率兵上京である。西国諸藩を脱藩した志士たちはこれを契機に倒幕のための挙兵に進もうとして、京・大坂は不穏な情勢となつていった。このような情勢の中で、4月、長薄は参勤となつた。脱藩中の平野國臣は何度か参勤途上の長薄に進言を試み、「大坂に集結する志士団は、長薄が久光の動きを妨害するのではないかと疑っているので久光と連携するよう」に勧めた。

長薄は不穏な動きに屈せず参勤を続行したいと決意するが、随行の黒田長門(筆頭家老・黒田播磨一整合の世子)の進言もあつて、本意ながら「病氣」(痛邪)と称して、国元へ引き返した。いわゆる大蔵谷回駕である。

文久2年の「京・大坂御用状」によると、京・大坂では長薄を迎える準備が進んでおり、大坂勘定奉行・大岡舎人や京都勘定・藪幸三郎も伏見へ出て、長薄の到着を待っていた。また長薄養母(10代藩主長清の正室)の実家である二條家からも「伏見御着御怡、且御旅中御見廻(見舞)」として御蒸菓子一箱「が届けられたが、「時節阿しく・・損」するので、「御品御返申上候」として辞退している。

《お詫び》前号(27・7・1付)の記事、「ちよつと うんちく」の中に「准后(明治天皇の生母藤原風子)」とあるのは、「実母」の誤りでした。訂正します。

訃報

当会顧問中島敏行氏病氣療養中のところ平成27年12月19日福岡市内の病院にて肺炎のため逝去。(享年88歳)

編集後記 藤香会だよりの編集を引き受けて二年経ちました。まだまだ内容の充実が図られませんが、先輩の意見を聞きながら深化するように頑張ります。ご協力をお願いいたします。